日本草地学会 大会報告

中野富雄

去る八月中旬、岡山県々北の蒜山高原に於て、日本草地学会及び全国草地大会が開催された。

日本草地学会は、創立十周年を記念して行なわれ、広く畜産及び草地の行政や普及、研究に関係する人々が参加、草地に関する技術的な諸問題についての研究発表が行なわれ、更に現地の草地診断を通じて技術的な討論が行なわれた。

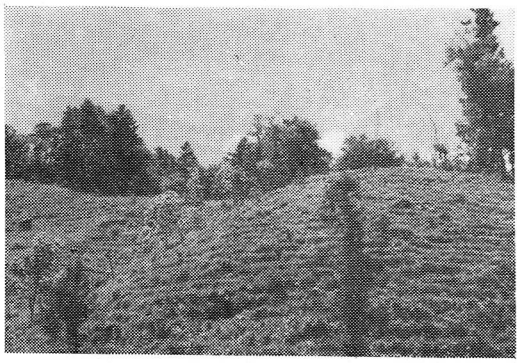
又、同時に各都道府県に於ける草地農業推進機関して活動している草地協会が、発展する草地農業の現況に鑑みて、全国的な組織として発足することとなり、本学会開催を機会として行なう第二回全国草地大会に於て、初名乗りをあげることとなった。

標高五〇〇㍍の広大な蒜山高原は、この日を祝福する如く晴れ渡り、約三五〇名に達する全国からの参加者によって賑った。

第一日は、現地視察が行なわれ、県営の乳牛育成牧場に於ける大規模草地、朝鍋牧場、湯原町種酪農組合の急傾斜地利用の草地などを現地について視察した。

県営乳牛育成牧場は、蒜山山麓に拡がる波状高原にあり、北に大山の偉容を望む風光絶佳の地、ここに岡山県立酪農大学校も設置されている。本牧場の牧野は、総面積一〇〇町歩、その七七町が改良草地、二三町は自然草地である。これを五牧区に分って、四月二十日から十月三十日まで、約一〇〇頭のジャージー種若牛の放牧育成にあてている。なだらかな起伏地に造成された草地は、いね科、まめ科の混播牧草地で、ムラもなく見事な生育を見せて居り、草を喰むジャージーの群も、如何にもゆったりとした感をうける。混播草種と反重播種量は次の通りであった。

オーチャードグラス	一・〇㌔
Hワンライグラス	〇・七
ペレニアルライグラス	〇・三
メドウフェスク	〇・五
赤クローバー	〇・八
ラディノクローバー	〇・一
計	三・四㌔


岡山県湯原町種酪農部落　急傾面に造成された階段状の草地

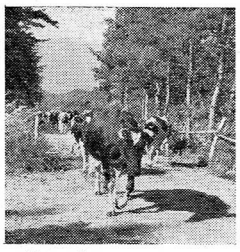
草地管理の内、追肥は年二回、草地化成肥料を反当二五～三〇㌔施用しているとのことであった。

湯原町の種酪農組合の所在地は、二〇度乃至四〇度の急傾斜の斜面に囲まれた狭い谷間の村で、谷間の水田単作に依存した農業であったが、昭和二九年集約酪農地域に指定され、乳牛を導入、酪農による経営安

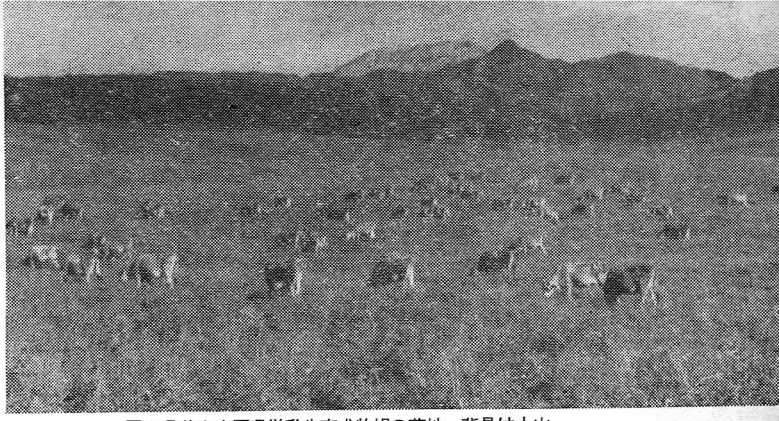
牧草と園芸　十一月号　目・次

	頁
□欧州園芸行脚 (八)　……沢田英吉	表二
□日本草地学会大会報告　……中野富雄	一
■成功する養豚養鶏経営 (一)　……長田家広	三
■秋の獣医日記……井上武夫	六
■今後の北海道果樹栽培の要点　……赤羽紀雄	九
■〃農家の副業として有利な〃 クリ栽培……中内武五朗	三
□バビヤグラスの特性と栽培法	表三

〈表紙写真〉放牧より帰る牛


秋の日ざしを一杯浴びて、放牧されていた牛が足どり軽く帰ってきた。岩手地方でも牧草主体の酪農が地についてきたようだ。

岩手県の牧場で



岡山県蒜山高原県営乳牛育成牧場の草地　背景は大山

定化に踏切ったものである。そのために水田両側の急斜面を利用して牧草を栽培するという画期的な自給飼料生産体制のもとに成功への途をあゆんでいる酪農組合である。

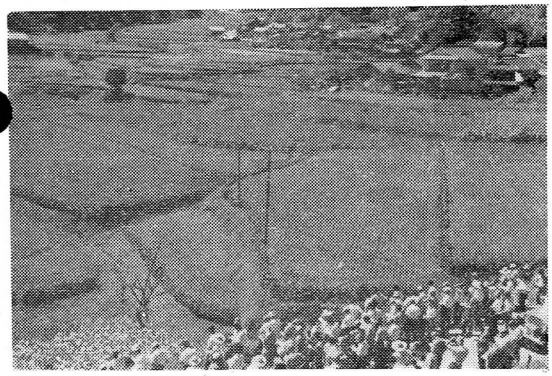
現在五〇戸の内二〇戸が乳牛を飼養、総頭数一〇五頭、一戸平均五・二五頭という多頭数飼育への方向へも歩みつつある。ここの酪農の基礎は、何と言っても前述の斜面の利用であるが勿論、水田の裏作、田畑輪換による自給飼料確保も行なわれている。

急斜面の草地化は、仲々の難事業であるが、先覚者永井氏父子の努力と工夫がこれを完成させたと言われている。階段状に削られた急斜面は、オーチャードグラス、ラデノクロバー、赤クロバーが混播され、四月から十月一杯放牧され、極めて効率的に利用されている。放牧は、春季の草勢の良い時は、一日六〜七時間、一区画について三〜四日間の間隔で輪換放牧される。夏は一日三〜四時間の放牧時間に短縮される。こうして年間の放牧回数は五回、五月下旬には掃除刈を兼ねて採草、サイロにつめる。

乳牛も馴れて、急斜面の階段を横に歩きながら採食して居り、省力面からも、非生産地が生産化された点からも、特に画期的なアイデアであったと思われる。最近は階段造りをブルドーザーで行なう方法も工夫されつつあった。因みに施肥量は次の通りとのことである。（反当　キロ㌘）

基肥　炭酸カルシューム一二〇〜一六〇、草地化成三〇、石灰窒素一五〜二〇

追肥　三月下旬　尿素一〇、塩加一〇、溶燐一五



岡山県湯原町種酪農部落附近の水稲と田畑輪換の草地（中央二枚の畑）

五月下旬　尿素一〇、塩加一〇

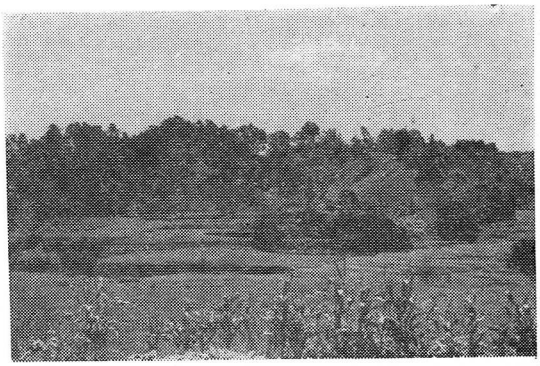
七月下旬　尿素一〇、塩加一〇

計　尿素三〇、塩化三〇、溶燐一五

（金額にして約二、〇〇〇円）

第二日目は、先ず全国草地大会が挙行され、農林省、県などの関係者参席のもとに、日本草地協会発足の披露、大会スローガンの発表、草地農業の強力なる推進を要望する大会宣言の決議などが行なわれて、大会のムードは盛り上った。新しく発足した日本草地協会は、二〇の都道府県の草地協会からなり、会長を熊本県畜連会長河津氏、副会長は、長野県草地協会長北原氏及び北海道草地協会長二瓶氏を夫々選任、今後の運営に当ることとなった。

第二、三日は、草地学会創立十周年記念行事として草地技術研究大会が開かれた。会長斎藤博士の開会の挨拶で始まり、草地関係の権威者、研究者を中心として、研究発表、討論及び現地視察した草地についての意見交換などが行なわれた。



種部落の水田と斜面

討論は、飼料作物の貯蔵加工、草地の利用、草地の維持管理、暖地型牧草の四部門については夫々行なわれたが、貯蔵の部門ではサイレージの調製と利用について、草地利用に関しては放牧に於ける問題点について、草地の維持管理については施肥、灌水、病害などの基本問題について、暖地牧草に関しては新しく登場した耐暑性牧草について研究発表と意見交換が活発に行なわれた。これ等の代表的な発表内容については何れ誌を改めて紹介をしたい。

何年来の酷暑と言われるこの夏も、蒜山高原では全く涼しい。この山麓地帯には各所に古墳が見られ、古代から農業が営まれていたことと想像されるが、山中の別天地として時代の推移からとり残されて来て、稲作主体の農産は、生産性低く、過去数度の冷凶作に悩まされて来たが、戦後、かつての軍馬補充部として軍馬の養成に使用されていた蒜山原野が開放され、一躍酪農地帯として脚光をあび、現在乳牛二、六〇〇頭、年間三、〇〇〇トンの牛乳を生産するところまで発展したが、その生産の根底をなしたものは、何と言ってもこの原野を緑化した牧草の栽培と活用にあったと考えられる。

この地に於て草地学会、草地大会が開催されたことも誠に意義深きことであったと考えられ、これを機として更に蒜山酪農の発展を祈らずには居られない。

（東京支店長）